

# 不穏な夢

野見山悠紀彦

聖福寺一二四代住持・仙厓せんがい義梵ぎぼん……なんと大層な名を背負ったものか……。いまさら、無用だ、忘れてくれと申してもどうにもなるまい。まして隠居したわしは、過去の遺物でしかない。まあ良い。さほど遠くない時期にわしは消え去る。

坊主になったのも己の思いからではない。十歳の子供に何が分かる。ただ口減らしの為に生家を出され、寺に預けられただけだ。両親に対する、恨みや辛みがなかった訳ではない。いやそれどころか激しく心を痛め、全身を以て反発した。もしわしに大悟があったとしたら、その時の虚しさ諦めが始まりであつたらう。無論、未だにそのようなものはない。

ただ故郷の清泰寺を出てからの十年は、己を忘れて激

しい修行に専念した。武蔵東輝庵・月船和尚の許での修行の日々は、それこそ死ぬ覚悟で臨んだ。月船和尚の寂滅を見届け、再び雲水となって諸国行脚に出たのは、偏に己の未熟さに気付いたからだ。

わしの十年間の修行が、何の役にも立たなかったことに腹を立てた。いや自棄やけこ糞くそになった。若かったわしは、誰でも苦しい修行を積めば、自ずから大悟に至ると考えていた。今になれば笑って済まされるが、大方の修行僧はそのように考えていた筈だ。その先には榮達えいだつがあり、誰しもが一寺の住持に上ることを思い描いていたのだ。

奥州を始め多くの寺を巡っていたわしは、兄弟子たちの推挙があつて聖福寺の住持に納まることになった。開祖が榮西禅師の手になる由緒ある禅堂であり、見知らぬ土地ではあつたが勇んで博多の街に赴いた。だがどうだ、

寺は大相な荒れようで、わしはまんまと乗せられた気がした。不出来なわしではあったが、それでも修復に最善を尽くし、一通りの体裁を取り戻すことができた。そして弟子たちの修行にも力を注いだ。

その後、本山住持への榮進を何度も打診されたが、わしにその自信がなかった。決して遠慮や謙遜からではなく、わしはこの居心地の良い穴蔵から離れたくなかっただけだ。

馬鹿げた話だ。何ほどのこともない。——普門も世間も所詮は同じ土俵に立っているのだ。世間と普門とを隔するものは、偏に坊主頭とへらへらの袈裟が一枚あるのみだ。世間と同じように、媚びもあれば讒言もある。今更かように申すのも、チビ猿だと云われたわしの愚痴に他ならない。

昨日の昼過ぎのことだ。門前で文房を商う原田屋の娘のおうめが、ひよっこり姿を見せた。

おうめと最初に出会ったのは去年の暮だ。出先から幻住庵に戻ってくると、土塀の下に立って、塀から覗いている寒椿を一心に見つめているおうめがいた。驚かせぬように近づき、そっと声を掛けた。

「椿がお好きか？ 進ぜようか？」

おうめは臆する様子もなく、大きく頷いて見せた。わしはその頭をさすりながら門の内へ招き入れた。手近な枝を二、三本折ってやると、小さく頭を下げ勢いよく門の外へ走り去った。それ以来、忘れた頃に姿を現し、門扉をこつこつ叩く。

おうめは五歳の幼子で、この幻住庵を訪れては半紙いっばいに落書きを描き散らし、差し出す菓子を食べつくすと、さっさと帰ってしまう。昨日も一刻ほど書き散らし、そのあとは何時ものように餅菓子を頬張っておつた。食べ終わり、さて帰るかと思いきや、半紙にお月様を描いておくれと云った。

確か前回訪ねてきたときに、わしは戯事ざれごとにお月様の絵を描いて渡した記憶がある。

そうか気に入ったのかと深く考えもせず、この度は半月を描いて簡単な贅を添えた。おうめは左程喜ぶ様子もなく、そっと手に受けると大事そうに掲げて帰っていった。特段不思議な思いも抱かず、その覚束ない後ろ姿を可愛く思いながら見送った。

それから半月も経たころ、観世音寺の住持から梅の便りが届いた。わしは早速天満宮の花見見物に出かけた。

一日掛かりで太宰府の観世音寺に至り、親しくしている巖山和尚と梅の見物に出かけたときのことだ。道すがら巖山和尚の語った言葉に、わしは首を傾げた。

「五日ほど前に、福岡城下の法事に招かれました。寺での法事が済んだあと、市橋様のお屋敷に招かれて茶を頂戴致しましたが、その折、あなた様の茶掛けを目に致しました。円相一つを描き、『これ喰ふて茶のめ』の贊が目を引きました。誠に禅味があつて宜しゅうございます」  
確かに描いた覚えはある。しかし、それは原田屋のおうめに与えたものだ。そもそもそれは、深い意味を込めて描いたものではない。菓子好き、饅頭好きの幼子に、喉を詰まらせぬように茶を飲めと諫めたものなのだ。それが何ゆえ藩の重役の屋敷に？ しかも茶掛けにされて？

わしはただ笑つて済ませ、その疑問を口にしなかった。どこかの物好きな輩が、たまたまわしの絵を手に入れて茶化して見せたと聞き流しておいた。

近頃は一段と身体の衰えを感じ、他行する機会も目に見えて減つた。久しぶりの遊行に気持ちか軽やかになる。白梅紅梅入り乱れて、漂い来る仄かな香りに心を委ねていた。巖山和尚の配慮であろう、白梅の老木のもど野点を楽しみ、伸びやかな気分を満たされた。

当夜は観世音寺でお世話になり、翌朝博多へ帰る間際に住持から頼み事をされた。

「博多へお戻りになられたら、一つ私にも茶掛けを描いてくれませぬか？ いや、ついでのときで良いのです。博多に出かけた折には、必ず庵をお訪ね申します。名物の餡餅を提げて参りましょう」

そう云つてにこやかに笑われたのだが、わしは忘れていた茶掛けの件を思い出していた。戯言で描き与えた殿り書きを、誰が茶室に持ち込んだのだ。その上、観世音寺の住持さえも絵を所望された。欲しいと云われるのなら、幾らでも描こう。ほんの一呼吸の間に描ける。ただ、この話を聞かされてから、おうめに描き与えた半月の絵が気に掛かる。自分から物をねだることのなかつたおうめが、お月様を描いておくれと云つたことだ。

今にして思えば、おうめの意思ではなかつたように思える。背後に大人たちの思惑が働いていたのではないか？ わしの絵が思わぬ金となり、ただ同然に絵を手に入れようとしたのではないか？ おうめは何も知らず、当人に何の咎もないであろう。

さりとて何の確証もない話だ。おうめが再び訪れたときに、それとなく尋ねることにした。

風呂敷包を両手で抱え、石畳に視線を落としながらゆっくりややつて来るおうめを門の前で迎えた。直前まで気付かなかつたらしく、わしの姿を目にすると微笑に笑って見せた。わしの傍に駆け寄ると、手にしていた風呂敷包を突き出した。

「これをおくれか？ どなたからじゃ？」

「じいちゃんが……」

「隠居の勘兵衛さんかな？」

おうめは大きく頷いた。

頭を撫でてやりながら庵の内に招き入れた。受け取った風呂敷包を開けてみると、高価な砂糖菓子が見れた。

黒田藩御用達の莫匠が謹製する『鶏卵素麺』であった。

これを目にした途端、わしは茶掛けのカラクリが見えたと思つた。

原田屋の勘兵衛は隠居する前から茶席の心得があり、藩士とも交流があると聞いている。一度どこかの茶席で、顔を合わせたこともあったように思う。その隠居が、孫が持ち帰ったわしの半紙を見て、知り合いの数寄者に持ち込んだのであろう。それはそれで構わぬが、おうめの要望で描き与えた半月の絵はどうなったのか？

「おうめや、この間の半月の絵はどうしたかの？ ほれ、『お月様いくつ 十三ななつ』と書いた絵じゃ？」

勘兵衛さんに上げたのなの？」

おうめは少し緊張した眼差しでわしを見上げたが、わしはにっこり笑って見せた。それで安心したのか、おうめはこっくり頷いた。それ以上おうめを問ひ詰めることもない。わしは届けられた菓子を早速切り分け、おうめと二人して堪能した。

半月の絵も誰かの手に渡つたのであろう。どれ程の礼金が動いたかは分からぬが、菓子の値から考えると一分や二分ではないようだ。わしの絵を欲しがるといふほどの値をつけようがわしの預かり知らぬことだ。勝手にすればよいが、幼子を手先に使うことは承知し難い。そう一瞬考えた。だが、わしの絵を欲しがるといふのである、幾らでも描き与えようと考えを改めた。

このことで、金子を得ようとするものではない。持参して来る者があれば、それも構わぬ。寺の庫裡へ納めれば良い。おうめに、またわしの絵が欲しいかと尋ねると、おうめは嬉しそうな顔をした。幼心に、いつ切り出そうかと悩んでいたに違いない。茶掛けになりそうな物を三枚ほど描き上げ、これで良いかとおうめに示した。頷いて見せたが、どこか納得した様子ではない。

「まだ足りぬか？」

するとおうめは立ち上がり、床の掛軸を指さした。

「掛軸の絵が欲しいのか？」

「長い、大きい……」

「そうかそうか、ならば描いて進ぜよう」

幼子が軸物の絵を欲しがる訳がない。わしは少し頭をひねって画題を考えた。そして管崎宮の正月神事である『玉せせり』を描くことにした。大勢の裸の男たちが激しく玉を奪い合う。まるで芋を洗うようだ。正月飾りには相応しいだろうと考えた。

描き上がった絵を有り合わせの桐箱に納め、箱書を認めておうめに渡した。箱書は、『金萬図』としておいた。おうめは菓子包を懐に、描き与えた絵を大事そうに抱えて帰っていった。

おうめの帰ったあと、わしは茶を一服立てながら、隠居の勘兵衛が絵を覗き見る姿を思い浮かべ、微かな笑いを堪えきれなかった。

絵に書き添えた賛には、このように書いておいた。

「玉せせり 玉かあたまか 金玉か」

だが、わしの上手をゆく者があった。この絵が堂々と、さる上士の床の間に掲げられていたと聞いて、わしは思わず手を打って笑う他はなかった。

## 原稿募集

### コラム、近況報告 原稿をお送りください

- ❖ コラム ほっと一息、ブレイクタイムのページです。  
内容は自由。ペンネーム可。  
400字くらい。
- ❖ 近況報告 ご自身の近況をお知らせください。  
同人のみなさまと誌上親睦をいたしましょう。  
200字くらい。

#### ▶原稿送り先

Eメール：2kyubundojinkai@gmail.com

〒818-0035 筑紫野市美しが丘3-1-10-601 目野方  
木島丈雄 宛

※締切……夏号は3月20日です。